

## 《翻 訳》

## 『権力の人倫的問題について』（8）

ゲルハルト・リッター著

藤 枝 征 司 訳

## 第五章 歴史と生

## ニーチェおよび現代生哲学との一つの対決

## 1.

現代の歴史的学問（die historische Wissenschaft）とりわけより新しい政治的歴史は、再三再四、生の実践に対するその意義について問題を突きつけられているかに見える。その問題が非常に精力的に要求していることは、歴史的学問が現代の生に奉仕しなければならないということである。歴史的学問は、人文主義的ヒルドウング《教育》の問題であるのではなくて、共同体への奉仕であるべきとされる。前提のない学問が存在しないことは、ほぼ、今日の共通の確信になった。ヒトラー帝国においては、誰かが《歴史的客観性》について話せば、それは、まさしく、ウンレーベンティガー非現実的な学問の兆候とみなされた。ここでは、すべての真正のそして真に偉大な歴史は、政治的実践の課題に常に献身するというものであった。近代のドイツの歴史家の中では、モムゼン、トライチュケ、ドロイゼンのような人物が、特に、政治的に能動的な歴史の模範例としてよく引合いに出された。

こうした主張の淵源がどこにあるのか尋ねてみれば、これらがすべて多かれ少なかれすでにニーチェとニーチェに由来する生の哲学（Lebensphilosophie）の中に存在していることが判明する。《過去の事物を生のために役立たせて、出来事をも歴史化する力によって初めて、人間が人間になる》（ニーチェ）。この哲学の根本思想は、生が理念より強力であり、生ける自然が第一義的な物、本来の被造物であり、

思想は演繹されたもの、第二義的なものにすぎないということである。そもそも理念が生を形成し得るのではなくて、それ自体、具体的生の反映にすぎないのである。さらに、ニーチェにおいては、創造的本能の力が過度の教育によって失われないかという絶えざる不安が付け加わる。彼の有名な《生に対する歴史の利と害について》（Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben）（1873／74）という論文は、全編それで満たされている。再三再四繰返し彼が対比しているのは、歴史の記憶に煩わされずに、本能のおもむくままに生きる健康でたくましい自然人とただ歴史的知識や知的な疑念の余りに決して力強い行動に走らないひ弱な教養人である。ニーチェは、行動する者は（ゲーテによれば）単に無責任であるだけでなく、必然的に無知でもある、と考える。すべての単純な本能を追放する歴史は、強力な人物によってのみ支えられ得るのであって、弱き者をそれは完全に抹殺する。何故にか？それは幻想を、即ち美しい楽観主義の、敬虔深い感情の、真の行動だけが可能であるあの雰囲気破壊する。そしてそれゆえに、英雄的な精神的偉大さと勇氣の理想像として、古代ギリシャ人は、根本的に《非歴史的な》人間であったに違いない。——〔これは〕しかし、すべての現代の生の哲学や歴史哲学において執拗に繰り返される非常に注目すべき観念〔である〕。ニコライ・ハルトマン（Nikolai Hartmann, 1882－1950）の《精神的存在の問題》（Probelem des geistigen Seins）のような重要かつ独創的作品においてさえ、われわれが耳にするのは、精神が

肉体を弱め、長期に継承されるうちに必然的に肉体の退化へ導くという断念された保証であり、——ついでに言えば、あらゆる歴史的経験に矛盾する主張である。精神が一般に自然の生命力を脅かすことを意味する場合には、純粋な、利害なき過去の事物の観察と解された歴史学（Geschichtswissenschaft）は、当然のことながら、著しく世間離れしているように見える。ハルトマンは、歴史学が生き生きとした現代の精神に力をかけてそれ自身を理解させることによって、それが生に奉仕し得るという可能性を否定しない。がしかし、彼は歴史学がその慣習的な仕方において生ある物を処理された物と単なる付随物から区別することに原則的に無関心であることを知り、それに対して（1936年の興味を惹く学術論文において）専門の哲学史家として批判的歴史観察の固有の新しい範型を提起する。即ちこれは過去の偉大な精神の持主をこれらの歴史的な環境から理解しようとするのではなくて、批判的に彼らと議論する現代の対話者として取り扱っている。

これは、ニーチェが第三番目の歴史観察の仕方として《記念碑的》<sup>モメントール</sup>〔歴史〕や《考古学的》<sup>アンティクヴァリシエ</sup>〔歴史〕と同列視している《批判的》<sup>クリティシエン</sup>歴史の概念にはほぼ正確に照応するものである。（ニーチェによれば）これらの三つ〔の歴史〕だけが、<sup>レーベン</sup>生に有効であり得るし、それゆえ唯一観察に値し得るのである。考古学的歴史は、我々の存在の根源性、〔つまり〕父祖伝来の信心深く保持された伝承の理想化された世界との結び付きを我々に明らかにすることによって、生の喜びを高揚させる——例えば愛情深く育成されたスイスの邦国史やカントン史の様に。記念碑的歴史は《活動的で力強い人物に奉仕する》、というのはこの歴史から彼が英雄的なもろもろの手本、即ち《昔でさえ可能であった》そしてその〔歴史〕観によって行為者の意志が鼓舞される偉大な記念碑的生を見て取るからである。もちろん、我々の哲学者はこの種の歴史像が冷静な歴史的現実にはほとんどあるいはまったく照応していないということについては十分に理解して

いる。これらの歴史像は学問的認識であるよりもむしろ芸術的能力の所産である。そして歴史の範型性は歴史的状況がこれまで繰り返されたことはないということによって、常に狭く限定される。しかしながら、この《芸術家史》においては、厳格な真実性よりもはるかに可能な限り印象深い造形の方が重要である。そして歴史的連関や状況よりもむしろ偉大な個別現象がその固有の対象となるのである。（ゲオルゲグループの《歴史的な神話》は、恐らく、この記念碑史の後年の産物と解され得るであろう。）ニーチェにとって、芸術と宗教は学問的知識をはるかに越えて、《超歴史的力》として、生きている精神（lebendigen Geistes）の独自の推進力として存在している。現に世間離れした《歴史的教養》が居座っている席をそれらに与えることが必要である。ほぼルソーの意味では単なる便宜性とみなされ、ブルジョア階級によって秩序づけられた存在の伝統的な根拠づけとみなされるこの教養と真に革命的な生を促進する哲学の力との間の対立が、ニーチェのすべての著作において、重要な役割を果たしている。

彼自身の性向は、明らかに、《批判的歴史》のものである（《批判的歴史》なるものが、いわゆる学務運営（Schulbetrieb）の批判的文獻研究と混同されてはならない）。その任務は過去を清算することであり、我々を過去の動きのとれない重圧から解放することである。《それは正義によって、ここで裁くことではなく、況んや、温情によって、ここで判決を下すこともなく、生そのものであり、かの不明瞭な、駆り立てる、飽くことなく自らに要求する力である。》彼の宣告は常に無慈悲であり、常に不公平である、というのはそれは決して豊かな知識の泉から湧き出たものではないからである。しかし、正義が自ら宣告する場合と同様に、大抵の場合、宣告はなされないであろう。《なんとすれば生起するものはすべて必ず没落する…からである》。人は生きてゆくためには、不公平でなければならない——それゆえ、実際に《生きることと不公平であることは同一である》。

従って、傾向史 (Tendenzhistorie) は明確に非常に印象深く生きる権利を与えるべしと判決を下した。歴史的《客観性》は常に非生産的な宦官階級の疑いをかけられている。死活にかかわる真実に比べてもはるかに多くの《どうでもよい真実》が存在する。真の歴史は、本質的に、それらの真実を劇的な統一体へ造形することを知っている造形芸術家の作品である。つまり、個々バラバラのものを全体に編み上げ、たとえ統一性がその内部になくとも、《構想の統一性を事物にもたらす》ことによって、歴史を《客観的に考える》劇作家の作品である。《客観性と正義 (Gerechtigkeit) はお互いに何の関係もない。共通の、経験的真実がまったく自らのうちになく、しかも極度に客観性の肩書を要求する歴史叙述が考えられ得るであろう。》そのような教説が現代の歴史学者の仕事に影響を及ぼしていることは、周知の通りである。

## 2.

《歴史的学問と生の実践》という問題に対する我々の態度決定は、本質的に、ニーチェと対決する形で、しかしニーチェの対極に位置し、近代ドイツ歴史学の創始者であるランケとも対決する形でなさなければならない。<sup>96)</sup>

ここでは、差し当たり、ニーチェの歴史に関する理性的判断 (Raisonnement) がかなりの程度の実証的意義を有し、彼の批判が正当な核心を持っていることが、承認され得る。

ニーチェが精神の自由な創造的活動の権利のために、実際に過度の《歴史的》思考と感覚に苦しんだ時代の相対的歴史主義と戦う時には、人は彼に賛同するであろう。芸術的創造、哲学的思考および神学が、のみならず法学や国民経済学のような、他の体系的学問でさえも19世紀後半の《歴史主義》のために衰退したことは、よく知られている。ただ、この歴史主義がドイツ的およびヨーロッパ的精神の創造的力の衰弱の原因と考えられるべきかあるいは結果と考えられるべきかは、疑問の残るところである。大よそ世界史を観察してみると、19世紀の歴史で

は、なるほど激烈ではあるが、しかし実際には革命的ではない発展の光景が見られる——いずれにせよ歴史的教養の不変性が、当時、ナポレオンの前の時代や現代と比べて、はるかに際立っていたのである。それゆえ、ニーチェが過度の伝統的な教養の所有によって脅かされると信じた創造的エネルギーの活力についての彼の不安は理解できる。今日もなお、我々の激動する時代において、革命的エネルギーの活力を疑いそして歴史的な教養の所有や微動だにしない伝承の法外さに恐れおののくことは、ずっと以前に没落した時代の処方箋を、まったく別の病気や危険に苦しんでいる現代〔という時代〕に機械的に転用することを意味している——従って、《歴史的》ヒストリッシュ〔という言葉〕を言葉の最も悪い意味で使っていることを意味している。

これに対し、今日においてもまだ似非歴史的教養の危険は存在している、つまりそれは《歴史的理解》(historischem Verständnis) を強調する余り、もはや黒と白の違いが分らなくなり、結局のところ、すべてのものがまさに《等しく有効》であって、それゆえどちらでもよいということになるような教養である。学問的歴史が《客観性 (Objektivität)》を求める企てにおいて、とにかく成し遂げられてその結果がある程度までそれ自体正当と認められたことすべてについて言い繕って、事後的に弁明しなければならない危機に常に置かれている場合、似非歴史的教養は学問的歴史においても重要な役割を演じる。このことは、特に、政治的歴史に当てはまる。そして〔これは〕偶然ではない！というのは、政治が永遠の権力闘争である限り、政治が歴史的に多少意義を有するとすれば、外面的な成果を持たねばならないということは、その本質の一部であるからである。成果なき政治家は何と言っても歴史上の大人物たり得ないが、しかし、このことが、同時に、大成功の野心家や乱暴者が誰でも歴史的偉人になるということの意味しているわけではない。歴史的偉大さというものは外面的な成功とは異なる別の物であるべきである。しかしながら、実際には、

外面的な成功を崇拜したがる傾向が数多く見受けられるのは、まさしくドイツの学問的歴史叙述においてなのである——〔これは〕おそらく現実的であるものはすべて理性的でもあるという危険なヘーゲルの命題の結果であるのだろう。この下僕的な傾向に対して、ニーチェは忘れ難い言葉を見い出した。彼が歴史的事実について《これは常に馬鹿げていて、いつでも、神よりもむしろ子牛の方に似て見えた》と話す時、戯画的な誇張にもかかわらず彼は間違っていない。彼が主張しているように、いつでも、真の偉大さは、一人の人物が《あの盲目的な事実の権力に反抗し、現実的なものの暴政に反抗する》ことにあるとすることこそ、現実的である。言い繕う歴史の危険は、疑いもなく、ランケの著作においてもはっきりしていた。18世紀の啓蒙神学に由来するランケの精神的出自、〔即ち〕歴史の摂理において至仁の父と世界の統率者を（もちろん《時たま》でしかないが）認めるという彼の信念、あるいは知覚し得るという彼の信念のゆえに、彼に悲劇的なものの暗黒の権力、予期されざる偶然のおそろべき暴力、すべての現世的偉大さの超自然的力（Dämonie）を必ずしもはっきりと感知させることはなかった。結局のところ、彼の確信は、世界史の戦場において勝利者としての地歩を固めるのには、より強力な物質的な力の結集だけではなくて、大まかに言って、より高次の道徳的エネルギーが必要であるということである。国家の《現実精神的》実在性という独特の未解決の概念によって、彼は容易にこの理解に達している。われわれ今日の世代は1848年革命前の《平穏な時代》のこれらの概念や観念でもはや間に合わせるわけにはいかない。我々は、あらゆる歴史において支配的である深遠な超自然的な力を1914年以来余りにもしばしばかつ具体的に目の当りにしてきた——あたかもドイツ史の老大家〔ランケ〕にとってと同様、我々にとって世界史が今日でもまだ輝く陽光の下に現われる如く。それゆえ、我々には、特に晩年の作品において際立っていたランケの余りにも洗練さ

れた名人芸に対するニーチェの異議、《原作の力強さと巨大さ》をもはや推量させないランケの歴史的学芸の《かぼそくて貧弱な弦の響き》に対するニーチェの異議は理解できる。ましてや、彼が批判していることは、ランケの模倣者や後継者の《去勢された客観性》を言い当てているし、通例、素材にへばりついて、真の判断能力の欠如を覆い隠すだけの《安易な楽観主義》を見せびらかす、ランケ後のドイツの《批判的》歴史学の実証主義者を適切に表現している。すべてを相対化する歴史は実際現実離れしていて不毛である。

しかしながら、ニーチェおよび現代の生の哲学の一定の原則のこうした承認には、一連の非常に重要な異議申し立てがなされる。

その本来の愛に相応しいのは、学問的歴史ではなくて、歴史的神話なのである。しかし、神話は代用歴史以外の何物でもなく、かかるものとしてもともと純粹で真正の真理感は疑わしい。真正の歴史の明晰で客観的な真実に堪えられなくて、自己の意志本能を弱めるという恐れからある種の人為的神話の幻想を求める者は、この本能がすでに以前から弱かったという疑いを免れない。真実性に対する恐れは、常に、不健康な精神状態の前兆である。実際、ニーチェ自身は、強い性格の持ち主こそが歴史的眞実に耐えられるのであって、弱い性格の持ち主は歴史的眞実によって《沫殺される》ということを知っている。それゆえ、ニーチェは身構えずに率直に彼自身の論文の結論部で、その恐れが《弱い性格の持ち主の批判の不合理性において、かれらの人間性の未熟さにおいて…かれらの現代的性格、弱い人格の持ち主の性格》を分らせてくれると述べている。確かに、何人もこの謙虚な告白をその作者の人格を貶めるために悪用してはならないだろう。しかし確実なことは、人為的に神話化された歴史（誰もこの歴史を実際に信じていないがゆえに、実践的にはすでに役に立たなくなっている！）のニーチェ独特の理想像（Idealvorstellung）が一種の時代遅れの、不健康なロマン主義に基づいていることである。

彼の《考古学的》歴史も《記念碑的》歴史も、結局、かの先史時代の《黄金時代》の原初の夢の後裔である。その夢はルソーによって再生されてザヴィニーや同時代のロマン主義的歴史家においても亡霊の役割を演じている。そして彼の《批判的歴史》は、真の冷静に自覚された力によるのではなく、不安感から無理矢理もたらされた不自然な反転にすぎない。この《批判的歴史》は、ニーチェの世界感情 (Weltgefühl) が根本において反逆の確信に満ちたものではなく、悲観的であればあるほど、なおさらますます信用を置けなくなる。自分自身の時代の退廃の《かつて可能であった偉大なもの》との恒常的な比較は、これまで現代の生の哲学に非常に強い影響を及ぼしてきた。

しかし、昔と比べて自分の時代が完全に退廃しているというこの観念は、それぞれの時代が達成すべきである無限の進歩という逆転した自由主義的な偏見とまったく同様に幻想である。すでにランケは、卓越した、冷静な洞察力によって、二つの幻想を退けた。《おのおのの時代は直接神に属する》という彼の有名な言葉は、歴史化する相対主義の萌芽を含んでいるように見えるがゆえに、危険であると思われるかもしれない。歴史と政治に関する彼の講演がもっともよく、実際、その言葉がいかに共通しているのかを示している。即ち《歴史が我々に教えることは、どの時代にもその固有の欠陥が付着しそしてその固有の長所としての能力が備わっている。それゆえ我々は絶望にも誇りや傲慢にも特別な基礎を置いていないということであります。我々はまた、どの時代にもその固有の任務が与えられ、示されていることを学びます。そして我々の時代も同様であって、我々は自ら真面目にかつ慎重にその任務を遂行する気構えを持たなければなりません。終りに我々は、人間的事物が盲目の、不可避的な運命によって左右されたり、妄想によって誘導されたりするのではなく、それらの事物をうまく成就するためには美德や悟性や思慮分別が不可欠であることを知るのであります。》ランケの歴史叙述の独

特の 파트スが、ここに最も強く表明されている。その 파트スとは、人倫的意志の 파트スであり、その人倫的意志は幻想、情緒そしてロマン主義的熱狂の《活動領域》に基づくのではなくて、もっぱら明晰な洞察に基づき、客観的真實の認識を恐れるのではなくて、この認識をすべて実践的行為の第一の不可欠の前提とみなしている。

[さらに] その意志は、人間の能力の生来の欠点や限界についていかなる幻想ももたずに冷静に仕事に着手させそして何らかの《神話》を用いた巧妙な棘を必要とするには、余りにも健康的で強力すぎるものである——またましてや、冷静な事実によってただちに打ち倒されるには、余りにも健康的で強力すぎるものなのである。

トライチュケがいみじくも最も男性的な学と呼んだ真正の学問的歴史は、かかる断固とした男らしさの明瞭で純粋な雰囲気に対応しい持ち場を得る。《生への》その作用がいかなるものであるのかについて、ランケは再び古典的な言葉で1871年ゲルヴィヌス (Georg Gervinus 1805–1871) への彼の追悼演説において開陳している。即ち《ゲルヴィヌスは学問は生に関与しなければならないという考えをしばしば繰り返し語っています。まことにもっともなことではありますが、実際に作用するためには、何よりもまず学問が学問でなければなりません。というのは、人は決してその見解を生に取り入れてこれを学問に転用することが出来るわけではないからです。その上、生が学問に作用するのであって、学問が生に作用するものではありません。しかし、生にとって、それぞれの各人が偶然にかかわったにすぎないことだけが決定の規準になることがよくあります。それゆえ偶然的なものが、普遍妥当的なものであるべきものに逆に影響を及ぼし、後者は前者に作用しないということになります。我々が、差し当り、その影響なるものを考えないで、自由な、客観的学問へ自らを高める場合にのみ、我々は現代に真の影響を及ぼすことができるのであります。》

それゆえ、学問的認識を通じて生を形成することが (この逆ではない) 課題になる。しかし

その課題はどのように解決され得るのか。

その第一のものは現代の歴史的構造分析である。政治的行為が成功するには、政治家が時に応じて考慮しなければならない権力状況や政治的諸潮流が生まれた歴史的因果関係を知らなくては不可能である。信頼できる仕方でヨーロッパの大宮廷や主要国の歴史的構造について知識を得たいという実務上の国政の必要から、まさしく現代の政治的—歴史的学問が生まれてきたことは周知の通りである。15世紀のフィレンツェの政治家たちの歴史叙述に始まり、ドイツ人スライダン〔Sleidan〕やリシュリューの近代国家理性と国家学の広範な文献を経てフリードリッヒ大王に至るまで、現代の学問的歴史に連なるはっきりと識別できる一本の線が通じている。18世紀のゲッティンゲン学派の歴史的國家学はドイツにおいてそれ以前の発展の終結と同時にランケの歴史叙述への前段階を画する。祖国の古代の遺物に対するロマン主義者の崇敬の念やロマン主義者の幻想欲求のこの発展への関心は、ヴォルテールのような人物の進歩信仰と同様に、決定的ではなかった。つまり適切な指針を求める者にとって、イデオログたちの狂信——かれらが前後のどちらを向いているかは、どうでもよい——と折り合いをつけることはそれほど困難ではない。その時代の大規模な立法への天職に絶望したザヴィニーの例は、黄金時代というロマン主義的観念が実践的行為をいかに無力にし得るものであるのかをすでに示している！行動する政治家に《その国家の本質を完全に知らしめること》が政治的歴史の最重要の実践的課題であることを、ランケは1836年のその教授就任演説で特に印象深く述べている。その際、実践的政治的理想として彼の念頭には、現に在るものに対して寛容で有機的な再教育を施すという方法が浮かんでいて、それは正確な歴史的認識なしにはまったく役に立たないという方法である。ところで、我々は、今日、生き生きとした力づくの干渉によって簡単に壊れてしまう、ランケとその時代が生きたような、国家的有機体の観念をもはや共有していないこと

は確かである。我々は、<sup>フォーアメルツ</sup>1948年革命前の保守的歴史家〔ランケ〕より革命的に生れ育ちそして彼の政治的提言をとりわけ国民的諸問題に関して余りにも慎重でありすぎるところかむしろ臆病であると感じるのである。しかしながら、彼の歴史的—政治的な尽力の根本思想には不朽の業績としての評価が与えられてもよい。即ち盲目の意志を破壊し、常に同時に歴史的生成物である現実的なものへの洞察——明晰な洞察のみを打ち立てるという業績〔に対して〕。

そこでは、現実的なものは、急速に変化し、再びまったく同じ形では繰り返すことのない歴史的出来事や状況であるよりはむしろ政治的、社会的そして経済的な制度や大きな政治的一精神的傾向、〔つまり〕その歴史的研究によって実践的—政治的効用がもたらされる政治的生活の潮流における出来事や状況の反映である。いわば歴史的生のすべての流れは政治的潮流の形になって現われる。（例えば、ヘーゲルとは異って）現代の生の哲学が（社会的生の《客体化》として！）制度の巨大な歴史的役割に対しても、大きな歴史的経験が民族全体の精神のおよび政治的構造に及ぼす持続的作用に対しても視点を欠いているとされるのは、この哲学の最も顕著な欠点の一つである。しかも歴史的生の継続性が最も印象深く見えるのは、幾世代にもわたって生き延びる国家の制度においてである。生き生きとした関心をもってその時代の直中に身を置いている歴史家は、人気の絶えた廃墟、消滅した生の空虚な外皮を過去に見い出すことを恐れる必要はなかろう。彼は、いたる処で、今日まで継続的に作用している制度や精神的諸力に遭遇し、そして過去のいかなる知識も現在を知らなければ不完全であり、過去の時代の知識がなければ現在を真に理解することはできないというランケの言葉が正当であることを知る。確かに政治的生の形成物は、その重要性において、精神の偉大な創造物よりもはるかに一過性のものである（それゆえ、精神史にとっても政治的〔歴史〕にとって適用されるものとは別の方法的原則が適用される）。しかし、偉大な政

治的創造物も、人の目にその永続的な痕跡をとどめずに、それらの創造物が消滅してしまうほどつろいやすいわけではない。

学問的歴史がこの形成物の独自性を把握しようとしている一方、それは必然的に個々の制度、個々の国家、個々の国民<sup>ナツィオン</sup>を乗り越えて普遍史(Universalhistorie)へ拡大していくだろう。あたかも民族的に限定された、祖国の歴史だけが、狭い意味で、実際に生活に即した、政治的に有用であるかのような観念ほど誤っているものはない。事実、その歴史がその観察の位置をいかに高くかつ包括的にしたところでそれで十分であることにはならない。別種の、疎遠な時代と比べても、私に理解できるのは、精々自分自身の時代の特殊性ぐらいのものであって、独自性、国民性、特殊な世情、特殊な歴史的遺産そして自分自身の民族の将来の可能性について私が理解できるのは、唯一、他の民族の歴史や世情との普遍的一歴史的比較による方法を通じてだけである。かつて、ヨーロッパの文明国のうちの一つとして、ヨーロッパの大共同体から離れて自国だけにかかわって日を過ごした国はなかった。この生の連関をヨーロッパ史のある時点で見逃すものは、全体を理解できないし、それゆえそこから何一つ正当な事を学びとることができないであろう。

なんとなれば生の連関を理解することはすべての学問的歴史研究と歴史叙述の第一の本来の課題であるからである。すべての真の歴史は理解可能な歴史である。そしてニーチェが(考古学的、記念的および批判的〔歴史〕と並んで)この種の歴史を一度もとあげていないという事実ほど強烈に彼の歴史観察の発作的な一面性を物語っているものはない！私がこれまで理解出来なかったことを私が愛したり憎んだり、賞賛したり断罪したりする時に、一体何が役に立つのか。理解できた者、すべての生の連関から理解できた者だけが、総じて独占的に正しいものについて判断できるのである。最適の(そして大いに誤解された)歴史的正当性は正しい理解に他ならない。そしてその理解からのみ歴史

的《客観性》の正当な概念もまた見い出され得るのである。

この非常に疑わしい概念を支配しているのは、依然として、極めて漠然としたものであり、そしてこの概念が頻繁に乱用されている。しかしこの乱用をもってしても、精神科学において、《客観的な》即ちすべての主観的、偶然的にすぎない思念の彼岸にある真実、現に在る事態の真実を探究することが肝要である事情は変らない。この真実が何らかの経験事実から単純に推論され得ると考えてはならない。真実とは、いわゆる精神科学の、即ち就中、(最も広い意味で)歴史的学問の領域において、いついかなる場所にあっても意味解釈(Sinndeutung)である、つまり、日々の経験と事件において我々の前に姿を見せる、差し当り意味のない、即ち理解不可能と思われる事実の混沌<sup>カオス</sup>を意味づける秩序である。どのような意味解釈も、当然、恣意の、主観的予断の誘惑には勝てない。しかしながら、学問的意味解釈は、仮借なき実証試験に立ち向かうことによって、恣意と予断を克服するのである。学問的客観性、客観的真実、解釈の試み(Deutungsversuch)が現実経験の直接的な、疑問の余地のない資料<sup>デーテン</sup>に即して実証される場合にのみ達成されるのであって、歴史家においては、学問的解釈の試みに適合しなければならぬ彼の原資料鑑定(Quellenbefund)の疑問の余地のない現実に即して実証される場合にのみ達成されるのである。これが完全に達成されない限り、学問的説得性は問題にもならないだろう。従って、学者の個々の解釈の試みも不完全たらざるを得ないだろうし、それどころかその試みはおそらくほとんどの場合不完全なものになるだろう。というのは、その試みが納得がいくように説明可能であるのは、現実資料のごく一部分でしかないからであり、他の現実資料を無視したりあるいはこれらと矛盾することになるからである。この意味で、我々は、常に問いかけるだけで、決して完全に知ることなく、真実の探求の途上に絶えずあるということは、正しい。それゆえ、学問的権威

における果てしなき、一見して決して終りのない論争、意見の多様性そして原則的な指針の多様性といったすべてが、門外漢や初心者を非常に混乱させる。しかし、この仕組みにともかくより精通している者は、直ちに、《学者の意見》の間を絶えずあちこちと揺れ動くことが問題となるのは、ここではうわべだけであり、永遠に更新される疑問と誤りの絶望的な混乱が問題になるのは、うわべだけであることに気づくのである。実際、そのようにあちこちと検討することによって現実探求の導抗にますます奥深く入りこまされることになる。時折り古い誤りに逆戻りすることがなくもないが、しかし、結局、一般に承認された欠陥を持った解釈（Fehldeutungen）の一定の基盤は徐々に必ず除去され、疑う余地のない、現に《保証された》、即ち実証された認識の基盤が次第に明るみに出されていく。歴史的現実の理解がますます細やかに、ますます深く浸透して行けば行くほど、論争はますます解釈のごく些細な差異に限定され、《見解》の微妙な違い、即ち観察の視点の単なる変化に限定され、歴史的生の永遠の変化が観察者にもたらすような視点の相違に限定されるようになる。真実は、結局のところたった一つである。単に、常にこの真実の新しい側面、新しい部分的見解が認められるにすぎない。純粋な学問の営為において、副次的なこと、つまり本質的にほとんど重要性を有しないことについての空理空論的論点へ逸脱する一定の危険な傾向が潜んでいることや、〔さらに〕論争の網の目にたやすく巻きこまれ、場合によっては単なる気紛れや学者の虚栄心によって枝葉末節な事柄がかたくなに主張されることを私は否定するつもりはない。これはすべての人間的なるものの不十分さの一例である。学問的営為も自然の創造過程も一定の力を浪費することなしには前進しない。しかしながら、以上のことすべてに当てはまるのは、本質的に、指導的人物の上層部ではなく、第二級の最上層部だけである。そしてここでは生の実践的要求が場合によっては再び効能のある矯正法となるかもし

れない。おそらく、暴力的な変革をとまなう、すべての学者の人格の高められた責任感をともなう我々の時代がまさに配慮すべきことは、大きな、基本的な、最終的にはすべてのことを決定する精神的存在の問題をますます前面に押し出して学問営為のうちでもごく些細なつまらない問題については言及しないで、慣習的にすぎない活動から偽りの輝きを奪いとることであると言ってもよからう。

学問は、それゆえ、つまるところ、現実探求に他ならないし、単なる見せかけや単なる幻想と予断から自由になることに他ならないし、厳格で堅固な、最も冷静な真実性である。この真実性は《宦官の如き》中立性とは無関係であり、通常の意味での公平性とは無関係である。客観的歴史叙述とは、恣意的ではない、認識対象に即して実証される一つの意味解釈である。これは事物の真の生の連関を発見し、これまでよりも深く理解することを教えてくれる——他方、《主観的》歴史、傾向的歴史は《予断》によって事物の真の理解を妨げることが見抜かれる。認識対象に即して実証することの不可避免性についていかなる逃げ口上もあり得ないし、超人格な《神聖化された》利害の逃げ口上もあり得ない。結局、いかなる歴史も実際に〔以上のことについて〕納得させることはできないだろう——そしてそれゆえついにはいかなる歴史も實際上何の役にもたたないであろう——つまり、歴史が明白な事態を歪曲し、歴然とした事態の連関を解明するどころか曖昧にするがゆえに、それは厳格な真実の審判に耐え得ないのである。

### 3.

これらのすべての考察の結果は何か。感情、情緒、熱情による興奮を目標とする代りに、冷静に《客観的》、即ち事実即ち認識を目ざすしかない場合であっても、学問的歴史は、それゆえ、現代の生の実践に対して決してよそよそしい態度をとるべきではなく、むしろ逆に、学問的歴史が初めて生の実践の正しい理解を可



能にしてくれるのである。学問的歴史は実践的生形成を麻痺させる障害であるのではなくて、反対にその生形成に不可欠な援助手段の一つである。学問的歴史家は、人文主義的教養問題という現実離れの学識の隠居分へ自分が押しやられて、いわゆる《実生活により近い》傾向的歴史に座を奪われるとは考えない。私にとって《実生活に即した》(lebensnahe)という言葉の意味するところは、私が無分別に、実践的日常闘争の原因となるような——正当、不当にかかわらず——情熱と偏見の渦中に身を投じることではなくて、むしろ揺るぎない真実本能をもって、私が歴史的・政治的現実を認識しようと努めることである。行為者が相手の相対的な正しさを見ないように、相手の言い分に耳を貸さないように、苦しまぎれに自分の目を閉じ、耳をふさぐことで、行為者はいつも《無責任かつ良心に逆らって》戦い始めるとニーチェが主張していることは、実際、本当であるとしても、それは歴史的学問の態度とするわけには行かない。学問は常に認識であり、そうでなければ学問は無である！歴史的認識を持つことは、しかしとにかく理解することを意味している。

ところで《全てを理解する》というような要求は実践—政治的でないどころか危険ではないのか。その要求は憎しみの力と同時に行為者のエネルギーを弱めることにならないのか。そして学識というものが、さながら冷淡に、《無関心な傍観者》としてその場に居合わせるだけで、《もともと存在していたように》、実際にいかなる影響ももたないままでいられるのか。実際にはそのような態度は——単なる知脳ロボットであって生身の感覚をもった存在ではないような人間がせいぜい到達し得る——自己欺瞞ではないのか。

差し当たり、すべてを理解することはすべてを是認することを意味することではないし、それは政治的および道徳的判断の放棄を意味するわけではない。それが起きてしまっただけで、確固たる地位を築いてしまったからといって、すべてを是認してしまうのでは、結果の後追いにすぎな

いだろう。しかし〔それは〕現実的認識ではないしそれゆえ現実的学問でもない。なぜなら学問的認識は常に批判的認識であるからである。学問的認識は成果だけでなく不十分さや欠点もよく見るし、偉大で高貴なものだけでなく卑小でみすばらしいものもよく見るのである。道徳的悪行の動機、その内的小および外的誘因を理解し、しかもそのうえその動機の不可避性を理解した時でも、道徳的悪行について審判することを放棄しないし、同様に、私が敵対的行為者の動機を完全に見抜いて分った時でも、私は私に敵対する利害に対する闘いを断念することはない。行為者が闘争の熱情の中でしばしば目が見えなくなることは本当だ——彼はますます情容赦なく殴りかかろうとして、半ば無理に目を閉じるからである。それにもかかわらず、次に述べることは注目すべき一つの経験事実である。即ち〔その事実とは〕我々が今日でもまだその内面によく通じ得る過去の最も偉大で最も賢明な政治家たち（私が想起するのはリシュリュー、クロムウェル、フリードリッヒ大王、ナポレオン、ビスマルクである）は、まさしく、闘争の激情が最高潮に達した瞬間にあってもその激情に溺れることはなかったし、ましてやかれらは自らの怒りでさえも氷の如き冷静な計算によって政治の手段として利用することを知っていて、かれらは敵の真の動機を冷静な明晰さをもって見抜きたいという気持ちの高ぶりを妨げられることは滅多になかった——まさしく、かれらの政治的卓越性は、他者を知り尽くし、他者の状況、他者の利害関心、他者の真の要求を時には他者自身よりもはるかにはっきりと把握できるというこの能力に、しばしば、基づいていることである。

いずれにせよ、真正の政治的本能や政治的熱情は、現実への認識、歴史的所与への認識によって意志が弱まることを気づかう必要はない。なぜなら、そのようなものは、足許のおぼつかない手探りの薄暗がりの中で行動へ急ぎ立て、その反対に理性的な認識の明るい陽光のもとでは消え失せてしまうような意志であるからだ！

盲目の大衆を統治するためには、場合によっては作為的な歴史の見解を提示する必要がある。大衆の熱狂を煽り立てるために、日常の政治的事件を理想化すること、かれらの怒りを目覚めさせるために、過去の事物の誇張した恐るべき光景を提示することなどである——しかしこれは、歴史的学問の問題ではなくて、政治的ジャーナリズムの問題である。両者の絶えざる混同が、すでに、ニーチェにおいて見い出される。

従って、これはもしかしたら無関心な傍観者として傍らに在ることであるのか。見分けること、理解することは、決して無関心に眺めることを意味するのではない。歴史的学問が日常の政治的闘争においてジャーナリズムの背後に引っこんでいるからといって、歴史的学問の無関心、精神的に関わらない中立性を非難することはほど不当なものなかるう。完全に、即ち心をこめてその傍らに在る者こそが、真に《理解する》ことができるのである。真の歴史家は常に心をこめて、彼が実際に偉大なものと認めたことには心から賞讃し、あらゆる俗悪で卑小なものに対しては嫌悪でいっぱいになって、その問題に対処している。——〔彼は〕偉大な祝福に満ちた作用を見て喜ばしい気分になり、あらゆる出来事で繰り返されるおぞましい悲劇に直面してひどいショックを受けたりする。歴史を実際に知る者にとっては、さほど精神の深い運動なしに、歴史の非常に壮大な戯れを傍観することはできない。そして、祖国を愛する者にとって、誇りと悲哀の感情について、国民的歴史のすべての共有体験が我々の間に覚醒させる希望と不安について言及しないままに在ることはほとんどあり得ない。しかしながら、真の歴史家は、彼が人間として、国家および民族の一員として感じること、望んだりあるいは期待することと彼が学者として把握することとを区別しようと努めるものである。真の歴史家は、政治的熱情が生を破壊する恐れがあると見た時には、政治的熱情の炎をいたずらに煽り立てたりはしない。激昂した時代には、真の歴史家は《民族的予言者》あるいは《先触れ》の役割を果たすよりも

勸告者、警告者の役割を果たすことのほうがずっと多い——我々ドイツの歴史家は、そのような予言者の役割によって冷静な現実観と政治的逸脱を曖昧にする危険が招来され得るということをつライチュケの例に即して学び取った（あるいはとにかく学び取ったはずである）。（余りにも差し迫ったラッパの音色によって最も美しい歴史的描写の芸術的作用が妨げられるということは全く別として。）成熟した歴史的描写技術で避けなければならないことは、何よりもまず、狂信的判断による排他性と画一性である。真の歴史家は、前もって実際に理解もしないで、決して意見を述べることはない。彼が目ざすことは、雄弁家のように日常的政治問題の実践の一具体的目標をまったく直接的に達成しようとするのではなくて、まず第一に、自分自身についての人間的な意識を一般的な形で解明すること、即ち歴史の中に現れる人間的なるものの本性についての人間的な意識を解明することである。認識対象について実証しないで、単なる感情からあるいは単なる政治的闘争熱情から発した歴史的判断は、尚更、学問的判断ではない。

歴史的学問にとって第一義的な目的は、所与の物への明白かつ正しい認識を教えることである。歴史的学問が考慮していることは、今日とか明日とかの政治的作用ではなく、長期にわたる政治的作用である。それゆえ、歴史的学問の政治的責任は今日や明日の責任ではなくて、長期的な視野での責任となる。歴史的学問が作り上げる歴史像は、時局的政治の願望の単なる反映、単なる反響であってはならない。なぜならその歴史像は政治的現実への明確な認識に永続的な基礎を与える手助けをするはずであり、この基礎に基づいて長期の視野に立って正しい政治的行為が可能になるからである。その上、歴史的学問は、場合によってはその学問的認識が政治的に不都合に思われることもあるということを甘受しなければならない。なぜなら、歴史的学問が自己の問題をまったく真摯に受けとめることも自己の責任の一部を成しているからである。歴史的学問が実際の政治に役立

つのは、それが当面の時局的政治の要求に応じ、その認識を前もって書き示すことによるのではなく、おそらく歴史的学問がその固有の時代の生き生きとした政治的要求から自己の問題を設定することによるものと思われる。現実在即した歴史的学問と現実から遊離した歴史的学問の違いは、真の政治的歴史がその政治的責任の何たるかを知り、それゆえ過去の塵埃を蘇らせる術を心得ているのに対して、後者の歴史的学問は純考古学的手法で行い、明確な認識目標ももたずに過去の塵埃中をかき回すだけであるということによって区別される。歴史的学問は生き生きとした要求に答えるような問題を設定する。なぜならばかかる問題設定によって初めて我々自身の生をより深く理解することが可能となるからである。

〔第五章了〕(完)

#### 原註

96) 本論文のテーマについては、より新しい研究『現代歴史叙述の問題性について』II「歴史の時代制約性と客観性について」(岸田達也訳『現代歴史叙述の問題について』創文社 昭和43年に所収)(Zur Problematik gegenwärtiger Geschichtsschreibung II : Zeitbedingtheit und Objektivität der Historie, in: Lebendige Vergangenheit(1958), 271-288, entnommen aus: Relazioni del X. Congresso Internazionale di Scienze Storiche Roma 4-11.9.1955, vol. VI (Firenze 1955), sowie: Wissenschaftliche Historie, Zeitgeschichte und politische Wissenschaft (Sonderdruck aus 《Jahrheft 1957/58》der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, 1958.)をも参照。

#### 〈お断り〉

本文を訳了した時点で「原註」を一括して掲載する予定であったが、都合により別の機会に譲ることにした。